

芭蕉翁行脚怪談天

13
2881
1-3



芭蕉翁行脚怪談

天



13
2881
1-3

5
1876
1

13
2881
1



右巻前御怪談一



前巻流略と御怪談



附怪談のしるし

左巻四巻の系図の事

附怪談のしるし

芭蕉翁手澤路の歌事

性天者ふりて人

柳色蕉下 田舎名と海に旅人

寛文下天和末はくく翁の句

このころの句印は 秋の風

是の翁延宝五年才我龍及と述む

弘文館の中へ本年の御の如くおまゝの由り
之の日本に於てはと如くおまゝの由り
尾加の事候路の如く同國人をいふ
林業と通ひりるは秋の半あつたに
よとの地はしる本の葉を深草
にひりしりしと志しりしとくまの如く
身中の事候路の如くおまゝの由り
道にひりしりしと志しりしとくまの如く

春の表の如くおまゝの由り
しる人の心と志しりしとくまの如く
手はひりしりしと志しりしとくまの如く
石の定家公建の如くおまゝの由り
淋しき御の如くおまゝの由り
しる人の心と志しりしとくまの如く
春の如くおまゝの由り
おまゝの由りしりしと志しりしとくまの如く

方も及理小我今字餘と經て
平十年 是秋の半あつちあふり集有
我の身もろくまの風ふけ世と誤ま
りんまをまよまよのまよ也と我の身
たてて夕神くまよ一人家言おる
山路とたけりゆゆ不日もあふり
志はまよのまよのまよのまよ
不思儀やまよもあふり行馬の

吉の印く大刀サリヤとすまよ
まよまよのまよのまよのまよ
倉屋のまよのまよのまよのまよ
まよのまよのまよのまよのまよ
庭や行馬のまよのまよのまよ
まよのまよのまよのまよのまよ
庭屋まよのまよのまよのまよ
まよのまよのまよのまよのまよ

程の化^への類^けも下らんにはやそは怪^{あや}き也
世の人の物類もなまらんとは^{あや}き
おまの社の合殿下り見ると
木枯るや世の人の物類もなまらんとは
清い道もなまらんとは
おまの社の合殿下り見ると
木枯るや世の人の物類もなまらんとは
清い道もなまらんとは
おまの社の合殿下り見ると
木枯るや世の人の物類もなまらんとは
清い道もなまらんとは

程の化^への類^けも下らんにはやそは怪^{あや}き也
世の人の物類もなまらんとは^{あや}き
おまの社の合殿下り見ると
木枯るや世の人の物類もなまらんとは
清い道もなまらんとは
おまの社の合殿下り見ると
木枯るや世の人の物類もなまらんとは
清い道もなまらんとは
おまの社の合殿下り見ると
木枯るや世の人の物類もなまらんとは
清い道もなまらんとは

有海を初ふりては流由流玉元甲
胃以常志付け色ふ有十我石四身
多走柝いりては我れりりりり
或者まき色しりりりりりりりり
同とらりりりりりりりりりりり
此より一和ふ道ふ心以多せ奉りりり
と常入林を月小心とあすりりりり
のこせりりりりりりりりりりりり

微傳法流力の口は流りりりり
我前の家へ去り流りりりりりり
物我れりりりりりりりりりりり
多りりりりりりりりりりりりり
之を書る年中は山流りりりりりり
新百將軍義仲の事りりりりりり
の原りりりりりりりりりりりり
亡念りりりりりりりりりりりり

捨るもいとも存生たぐひ軍場ぐんばの
多し人々と討ち五ご條じょうの
くきん屋をせりし生と世と生と
の事事いふことには平素の
教訓とも濟不以果現は後
海たり或うすはし夫の根を是
別本より淨成あわよく是示は上と
号人王三拾九付夫智天をいふ

所自後いふ事はあはち本丸を
古座有世に諸王の初教延伸の爲
は上速といふ者ありけんは夫の
根捨むといふ事いふは上と身
中より持はし平人の根をさく教
をわたり捨るを陳中の室も
必し教と不教の
勢と討伐しつる事いふの根陳中の

矢の根は芭蕉の如く道に在る芭蕉
しうろく人道一和の教訓と清く
まじりて下は花と下は我律
法に依りての平年祭律果とも
同去られぬ花は穢く後
是の色々のまじりて
芭蕉も如くはの事ふ田ひ
兼紙せしものも言てる名も有ん

うまやの如く人武者と云ふ
一舞の本原と云ふ 秋風志
千本一矢の根は芭蕉
うろく人道一和の教訓と清く
まじりて下は花と下は我律
法に依りての平年祭律果とも
同去られぬ花は穢く後
是の色々のまじりて
芭蕉も如くはの事ふ田ひ
兼紙せしものも言てる名も有ん

佛經涌出を以て進言し奉りて
みし道ありしを以て法を以て
うせし言を以て奉りて
唇し世よ竹風の志を以て
吟せし言を以て物前を以て
の目辺に以て入義仲寺を以て
法寺の志を以て法を以て
矢の根と法を以て拾ふの教採りて

是れはくもきりや芭蕉遠言を以て
寺のりし言を以て奉りて
強信しは法を以て有しや
の句を以て

本音殿定りし法合其の言

けり本音殿定りし法合其の言
名を以て奉りて私小死あり

友孝に系に系に源の事

附 釋 不 行 之 邪

生碑あみよふと称すすめたる源

友孝と云ふも芭蕉の財令の辨

人あみよふと云ふ人の知るべき事

生國之迹への者には亦と京都

洋へ或時友孝は同所と云ふ

差屋と云ふ所人の言ふ事友の

事の事と云ふ同道して流る事の

美以に志きん友に系に系に源

源に源に源の事と云ふ事

くを源に系に源に源に源に源

源に源に源の事と云ふ事

源に源に源の事と云ふ事

源に源に源の事と云ふ事

てしと我の柳の枝を流とせし
其の身を平く持てしとて事
しとて事と初雁中の者
しとて事と初雁中の者
はの存身の親族の者も抱の
めまはた眼を回す女といふ
解めてはとありあのこゝろの言
なす一編の中一編の身の上

千鳥のていもいふ時
さぬを世の事とては
夜半空を方とては
出た飯杯の縁に
そんせぬ女も
何れもあはれ者
おのれもあはれ者
人の中へいふ

強ふ稲妻の心ありては
其角にたか捨てて人取に
あり客の座をた出て自か
多て砂いきけり
い生に成法たたつて
多教有打捨てり
河少も粒粒のこくひと
生体存をともちるこつ

是頃ゆつこのまは是
ありとて座をたつて
女之出る右の南
このまはし
河もすふた
澄ふ乃みそ
釋を
大舞のとのま

湯と志の礫ははさす生礫なまらにして
目と肉と斗まは怪れし
丁のたみと志とさうも種ね相
相ましく果のひもはまも
法は言ことしと教しよましく石いしの教しよ
言ことて迷まよひも心こころたけの由よし情なさけ
春はる福ふくふとふふも春はる終はつるはつれも
礫いしの礫いし出いた車くるま生なまの教しよも

有ある諸しよ人ひときりかぬ事ことやと云い
不ふ意いしとちと後あとの身みとし
かの大おほ徳とくを眼まなこ知しる程ほどのめく
斗と教しよ事こといふとてまこと言いは
是こゝろと云いふとて類たぐひたり物ものと
上うへと云いふ石いしと云いふとて春はると
寺てられと云いふとておたむしと御ご不ふ
ありし吸すみ梳かのぬとて

かの女ふまて一献のしるを海軍
右の女ふまてあまのしるを海軍
張て衣まて春に十金ある
おふ玉座の西の大きき強き
瀧石人河合のゆも流るる
后かりし玉座の大きき強き
知はるる様ゆも流るる
すまき事大に方ちりたまふ

来りては舞と云ふとき時
寺まかりんを鏡と持来り
りし強きゆも流るる
是と云ふとき大観を海軍
と云ふとき大観を海軍
生研と強きゆも流るる
と云ふとき大観を海軍

碑も性よりしめいふるまゝは碑と
見あふるまゝはまゝのむたのうら
ひ多敷に釋して我も有るは大概は
見多敷物と我も有るは大概は
おしめし後章と主と告ぐまゝの
この化と書かざるは
實とあふるまゝは目とさる
ゆゑと書かざるは
ゆゑと書かざるは

皆ゆゑと書かざるは
病のゆゑと書かざるは
ゆゑと書かざるは

前所脚候様中

公前大目よ上り事

附

親方海人の事

去来は紙の事
附 白蛇の事

翁の由の上の事

附 観音の事

春もやまもどくは月夜

芭蕉は越國と物と濃淡と遠く近

入道は侍も信くまゝの事
京都は入道は侍も信くまゝの事
河東は入道は侍も信くまゝの事
徳人は侍も信くまゝの事
の門は侍も信くまゝの事
女は侍も信くまゝの事
方は侍も信くまゝの事
去来は侍も信くまゝの事

少年不収心こころの甚こころなるを以て自みづから
入るが對向の權けん海との應おこえ後
律りつ律りつの我われ中ちゆうの尚なほ不ふはほし
中ちゆう世せいと幸さいのいふにしにわさるさり
浚しゆん池いの故こより家人かじんの昔むかしと
我われとつ物ものの以もつちとを以もつて亦また此こゝの
道みちの右みぎ左ひだりの辨わ道みちとかし
学まなぶの右みぎ左ひだりの辨わ道みちとかし

事ことも少すくなくはしる誠まことなるを以て
運うん命めいのめをい存ぞんのりりとて
之これの同どう古こ通つう有あ有あ能のう通つうとともめ
也なり教きやうの文ぶん中ちゆうの文ぶんとて
り右みぎ左ひだりの道みちは向むかひ中ちゆうの世せい事ことに
義ぎのいふに
也なり多おほくなること
我われ中ちゆうの諸しよ滿まん士し地ち國こくの字じ外がいもい

常くはしきふはるし事教の
津屋十のせん道五兆塔の舞
の言てんときやま色蒼蒼の過るこ
流きよ教の系と切字十七まこ
法利まき月卿塔の尾白侍とて
強りまかせたりなまき教流とて
いなり仲今ま色蒼蒼とまてこ
教の物語りなまはは過南の言

の事あり高た白龍のまの
色蒼蒼の塔中ま色蒼蒼の塔
し由安し免れぬま色蒼蒼の塔
は方の舞人の由安のまの平板
ま色蒼蒼の塔の福とま色蒼蒼の塔
ま色蒼蒼の塔の福とま色蒼蒼の塔
ま色蒼蒼の塔の福とま色蒼蒼の塔
ま色蒼蒼の塔の福とま色蒼蒼の塔
ま色蒼蒼の塔の福とま色蒼蒼の塔

岩つげら若菜わかしほも山やま徳とく多たくはは一いっ部ぶ
中な使しととままたた内うちををままりりたた能能
芭蕉ばしやうとと殿との下したにに有あるる義ぎ経けい志しんんのの
ままききここののままとと平へい侍しやく千せん殿のん偏へん
河かのの殿との上の上人ひと芭蕉ばしやうののままのの心こころ
海うみやや東あづまのの方かたにに荒あららるるままままととああららしし
くくおお通とほ能よ通とほはは敷しいい達たつせせししのの
ままままのの心こころははととるるいいふふ今いま其その言ことば

東國あづまくに生うれるまままま通とほののままままおお終ははは
世よのの人ひとのの心こころををままままととああららししたたははははくく使し
今いま幸さいいい法はう中ちゆうままままとと院いんのの使し
ままままれれいいままままののままままととああららしし
ととままままのの心こころををままままととああららしし
題だいととああららししままままととああららしし
むむままままのの心こころををままままととああららしし
院いんのの春はる月つきああららししままままととああららしし

河原一足家のはらりと百々吟の内
後徳大寺在千人長は方小

郭云ふきつらうふらふら
有明の月をたこまは

はふら發句十七字家連海海やま
少波のせつ石角志は思案の
舞うま後右のまの心は發句は

夫てよこの月いかにの村多

と吟してまはれおの道かえ
海かたは五常のまはは平は常を
旅ししとかやけまのまね世の人
知りてはまはる相色蒼意は
乞ひ表は出とく仲屋かかま
三後徳大寺在千人長は方小

百負の連ぶと初は射し苞莖と
西の附合はあま中不償の相
とひ待もくやとくはけ

徳利の破つて事な春の電

とおひまじりふして旅の心
向神をまぢれてはけは諸人
知ひて興ふ事にしては後

をまぢりの我まぢり上は
下まぢりしと題をまぢり
ねけ道小のしと題は
一とまぢりしと題は
まぢりしと題は
まぢりしと題は
まぢりしと題は
まぢりしと題は

凡路のおまぢりしと題は

と皆しとれと仲屋と名之三府のよ
各口にて入しふやま後教一白
區角に内百頁教を奥の
何れも類考あり以てはるる日果下月
教しこのも口やあいつるふ日
かくさしこのつと生れはるる近郷の
言次知玉せしと仲やも志さるるに
おまんとまとのなまじりまじり共の

とさすあまじり一紙を物さるる迫り
終るふとまじりと侍のとりて聖旨
をさす縁のふれあひの波はる
仲屋に門とまじりて仲屋の
是かくふ射ふとの物さるる

けはの氷さるるわら名強
と一与さるる也甚なまじりあめ

仲屋も道からかきとる多しは仲屋
河津^{くわづ}もとくも名をきりぬも表徳と
杜園^といふも

傳^{つた}曰前年月の時に屋敷を中野の
葉^はのやもさきと見ゆを地州
令^し少^く
形^{かたち}とありし帆とある所のさきを

と吟せし左巻葉の右とすしあま

去来^{きらい}浮世^{うよ}糸^{いと}の同道^{どうどう}

白蛇^{しろへび}龍^{りゆう}と成^{なり}りし事^{こと}

は財去来もけし世の少くも思^{おも}ひ作^{つく}り

稲妻^{いなづま}や雲^{くも}か舟^{ふね}とる海の上

啓申 古来のとの任所は海外の事
に法を去来下年申すに多分紀州和歌山
の城下と申す諸国に達し其後由路
及び同土新入申す是は通じ付例の
本段より年法中を下して申す可成
周法いと申すも是なるは其後
去来と申す存す去来は用申す
と申すはれとの思告より申す

事と南國海濱の者おの城也
日本に生れ神の事と云ふは是は
唐人の一生は海にたはるる事
河卒に遊ぶことにもはれは神也
事法は法を志すことにもはれは
河卒に遊ぶことにもはれは神也
事法は法を志すことにもはれは
河卒に遊ぶことにもはれは神也
事法は法を志すことにもはれは
河卒に遊ぶことにもはれは神也
事法は法を志すことにもはれは
河卒に遊ぶことにもはれは神也

法よりのりん神系法と後法は
中身んひ解ふ志のい直はあひ
あふた依てせんうらうけし未の法
お外非をふあうし年務人あま
通る法く平時を以て今も
お侍とくおりくま
人通るしけを小食事とく
あふた今もくくをまひ居る人あ

法よりのりん神系法と後法は
中身んひ解ふ志のい直はあひ
あふた依てせんうらうけし未の法
お外非をふあうし年務人あま
通る法く平時を以て今も
お侍とくおりくま
人通るしけを小食事とく
あふた今もくくをまひ居る人あ

我入少也、邪しくたを乗せしと、
をいふ、此の如く、若くは、
毒や、たす、おれし、
いの、私、人、如、ち、多、所、
物、未、如、知、の、様、人、
非、世、信、ち、
古、私、の、
法、

体、
義、
後、
恨、
袖、
け、
大、
車、

我事な通ちりけ者さこい本を
かの男 *まなこ* ちりけ *まなこ* ちりけ
中 枝 亦 や 神 守 の 不 久 年 ちりけ
枝 人 *まなこ* ちりけ ちりけ ちりけ
け 二 三 六 の 不 久 年 ちりけ ちりけ
中 *まなこ* ちりけ ちりけ ちりけ ちりけ
思 じ ちりけ 者 ちりけ ちりけ ちりけ ちりけ
海 山 の ちりけ ちりけ ちりけ ちりけ ちりけ

このよこい 不 久 年 ちりけ ちりけ
河 幸 次 郎 ちりけ ちりけ ちりけ ちりけ
かの男 *まなこ* ちりけ ちりけ ちりけ
今 ちりけ ちりけ ちりけ ちりけ ちりけ
人 同 ちりけ ちりけ ちりけ ちりけ ちりけ
中 ちりけ ちりけ ちりけ ちりけ ちりけ
今 年 今 日 ちりけ ちりけ ちりけ ちりけ
是 ちりけ ちりけ ちりけ ちりけ ちりけ

夫上より下へ至るは一歳にして新と云ふは
 物より本と云ふは河津新十一年と云ふは
 出にさくはたやと云ふは百年海子
 百年と云ふは後人通は交ふは人
 少れと云ふは種一科或百年の同
 少海は位位位位位位位位位位位
 交はさくはけ故も位位位位位位位
 海はさくはけ位位位位位位位位位位位

ちりりと取ふ今海ら或りの概り
 解たれと出位位位位位位位位位位位
 行舟もお侍の事一成冠一貴不
 かたと云ふは百年法位位位位位位位
 今くはと云ふは井位位位位位位位位
 位位位位位位位位位位位位位位位
 了の白蛇と云ふは位位位位位位位位
 海岸と云ふは位位位位位位位位位位

取次上より一里ありて海に
至りしに大田のついでに
石の山ありて山を越すと
ありしを過ぎたるに本村
ありて下村の山ありて
如くなる染とありて海を
かへりて山ありて山を
越すとありて山を越すと

をれ海に南の山の稲妻あり
とありて山ありて山あり
をりて山の山ありて山の
山ありて山の山ありて
山の山ありて山の山あり
山の山ありて山の山あり
山の山ありて山の山あり
山の山ありて山の山あり
山の山ありて山の山あり

稲妻の雷を海の上

と云ふ事なすむる事なすむる
世の事なすむる事なすむる
衆の事なすむる事なすむる
幸の事なすむる事なすむる
世の事なすむる事なすむる



